

書評

小川真和子 著

『海をめぐる対話 ハワイと日本』

(塙書房、二〇一九年)

赤嶺 淳

ホノルルでサイミンなるヌードルを馳走になった。

起源も語源もあいまいだが、日系人の考案によるものらしい。鰹出汁に鳴門巻き、錦糸卵、海苔はわかる。ワカメならぬツユムラサキが色合いと食感を添えてくれる。チャーシューとワントンのみならず、海老フライまで浮かんでいる。丼は冷麺風のステンレス製。この多国籍な混淆こそがハワイアンなのだろう。

二〇一八年六月末のこと、オレゴン大学のライアン・ジョーンズ (Ryan Tucker Jones) さんが組織した「文化と種をつなぐ——新たな太平洋捕鯨史へ」(Across Cultures and Species: New Histories of Pacific Whaling) のためにホノルルを訪問しており、ハワイ大学で教える旧知のフィリピン人が案内してくれたのだ。

史苑 (第八一卷第二号)

同会議は、単に太平洋における捕鯨史を語りあうのではなく、太平洋という海域をひとつの有機体とみなし、鯨類と人類との関係性の多様性に着目して太平洋史を描きなおすことを目的としたものだった [Jones and Wanhalla (eds.) 2019, 2021]。

アメリカ研究を専門とする小川真和子による本書も、新たな太平洋史の開拓に貢献するものである。控えめながらも、著者は自身の研究目的を以下のように述べたことがある。

近年における太平洋の歴史研究では、この海が人と人との間における商業、文化、政治、そして軍事といった、色々な分野における交流の場として機能してきたことのみならず、そこに生息する様々な生物もまた、太平洋世界を形作る重要な構成要素とみなして有機的に関連づける試みがなされている。一国史観を超えた太平洋世界の全貌を実証的に解明することは本書の考察対象の範囲を超えているため、ここでは主にハワイと日本の関係の叙述に限定せざるを得ない [小川 二〇一七・一九]。

こうした太平洋世界を俯瞰する視座を保持しつつ、本書は、著者が「海の民」と呼ぶ、和歌山県、広島県、山口

県、沖縄県の出身者を中心とする人びとによる漁業活動が、いかにハワイ社会の形成に寄与したのかという命題のもと、太平洋戦争という日米の武力衝突のはざまで生きることを余儀なくされた日系漁民と戦後にハワイの水産業を再興した占領下の沖縄からやってきた新移民の生きざまを、フィールドワークで採録したミクロな家族史と個人史で紡ぐ労作である。

なぜ、「海の民」なのか？　そもそも宮本常一や網野善彦らが移動を常とする海民に着目したのは、なかばイデオロギー化された稲作から見た日本社会像を相対化し、日本列島の歴史をアジア大陸や太平洋に拓いていくためであった。しかし、そうした先学が一定の評価を得ている今日においても、ハワイにおける日系移民社会の研究は農本主義的発想から抜けさせていないからである。

従来の研究では、たとえ太平洋の中央に位置するハワイが視野に入っていたとしても、その周辺の海と移民の労働や生活との関係が取り上げられることは稀であった。しかし、たとえハワイの砂糖キビ畑で働く人々にとつて、海が日々の労働と無関係な存在であったとしても、ハワイで暮らす日本人移民の多くは魚や米、野菜を中心とする食生活を送っていた。そのため、その日常は、食を通

じて海とつながっていたのである。／それでは、ハワイの食卓に魚を届けていた人々について、われわれは一体、どれだけ知っているのでしょうか「小川　二〇一九：六」。

わたしにとつてのサイミンの衝撃は、そのアメリカンなポリリズムもさることながら、実は鳴門巻きにあった。外縁部まできつちりと紅く染まった様子に違和感を覚えたのだが、それが野暮ったさに起因することを悟ったのは、本書を契機としている。ハワイで鳴門巻きが製造されるようになった経緯は知るよしもない。本書には一九二〇年代のこととして、「海における漁船の大型化や改良が進む一方、陸においても水産加工業が活性化した。……広島県から技術者を招いて蒲鉾製造を開始したところ、評判を呼び、ハワイ各地から注文が殺到した」とある「小川　二〇一九：六一」。こうした過程で鳴門巻きも誕生したのである。著者が投げかける「ハワイの食卓に魚を届けていた人々について、われわれは一体、どれだけ知っているのであるか」との問いは、サイミンに浮かんた不格好な鳴門巻きを目にし、「律儀に昔ながらの製法を守っている」程度の想像しかめくらせることのできなかつた、「海域世界研究」を標榜するわたしに向けられたものでもある。著者はつづける。

要するに、日本の海の民がハワイで紡いできた歴史は、陸の民であるプランテーション労働者の体験と大きく異なっているのである。その海の民の物語は、……：苦労や我慢、あるいは子どものために自己犠牲を払うといった感情よりはむしろ、地元住民の食生活を支えているという自負や、ハワイで近代的な水産業を立ち上げ、やがて砂糖キビ、パイナップル生産に継ぐ主力産業へ育て上げたことへの誇り、そして「搾取する側」に立っていたはずの人々をも取り込むしたたかさに満ちあふれている【小川 二〇一九・七】。

新しい技術を積極的に摂取しようとする進取の気質や地球大とも思える世界観は、日本だけではなく、世界の海民研究でも指摘されることである。つぎのエピソードは、そうした機知と行動力に富んだ海民気質を語ってあまりある。

南紀の串本出身の小峰平助は、最初にバスポートなしで上陸できるボルネオのサンダカンへ渡ると、その領事館に向いて兄がいるフィリピンへの上陸許可を得た。フィリピンで兄の商売を手伝ううちに、船乗りになりたいたと思いはじめた小峰は、兄の友達の誘いで二等機関士

史苑（第八一卷第二号）

としてニューヨーク行き船に乗り込んだ。途中、船がホノルルに寄港すると、現地在住の従兄弟から誘われて夜中に船から海に飛び込むと、従兄弟の小船に乗り込んだ。そしてホノルル港へたどり着くと、その後はカツオ漁船に乗り込んで働いた【小川 二〇一九・三四】。

本書はバイタリティあふれる小峰のような人びとの語りで満ちている。むろん、こうした人びとが力量を発揮できたのは、同郷の人びとの支援があったからである。かれらが生きていくうえには、ハワイ人たちとの確執もあったし、中国系移民とも競合せざるをえなかった。そうした問題は、日系移民全体の問題でもあったと察せられるが、異民族とのつきあい方は陸と海とでは対照的であったようである。プランテーションでは、労働者同士が団結してストライキを起ささないよう、人種や国籍などによる労働者の「分断統治」が徹底されていた。しかし、水産物の流通を改善するため、日中の水産関係者が国籍を超えて協働することはめざらしくなかった【小川 二〇一九・三八―三九、九三―九四】。資本規模が小さかったこともあるが、鮮度が命である水産物を商う以上、民族間共闘は当然の帰結でもあった。

このように、ハワイの海を生業の場としてきた「海の民」

の視点を分析の中心に据えることによって、著者は「サトウキビ文化」(cane culture) ということばに象徴される、プランテーション労働者の体験に基軸をおいた従来のハワイの日本人・日系人に関する研究からは見えてこなかった、海域世界としてのハワイ「小川 二〇一七：一〇」を描き出すことに成功している。今後、日本列島から東南アジアやオセアニアに移動していった「海の民」の歴史を統合していけば [Butcher 2004]、太平洋史への貴重な貢献となるはずである。

だからこそ、気づいた点を付記しておきたい。日本人の流入が本格化する四〇年ほどまえのこと、ハワイは絶頂期をむかえた太平洋捕鯨に参画した船舶の寄港地として繁栄をきわめていた。ジョン・マンとして知られる万次郎がホルルルに寄港した一八四一年から数年後のことである。

そんな最盛期に「米国や英国から一万七〇〇〇隻もの捕鯨船が寄港した」という記述は [Ogawa 2015: 33; 小川 二〇一七：三九、二〇一九：二五]、桁なり単位なりを取りちがえたものではなからうか？ 三〇〇トン級の帆船には三〇名前後が乗りくむことが一般的であった「森田一九九四：九六」。本書の数字が正しいとすれば、年間に五〇万人を超える捕鯨者が逗留したことになる。クックが到来した一七七八年には二〇万く五〇万と推定される人口

が、欧米人との接触によって一九世紀なかばには八万人に激減したという「小川 二〇一九：二二」。そうした小人口で六倍ちかい訪問客に対応しきれたものであろうか？ 第一、最大人口が五〇万だった島嶼社会で、利他的な滞在とはいえ、最大人口に匹敵する捕鯨者を養えたかも疑問である。

深甚たる太平洋史の構築は、はじまったばかりである。細部の勘違いを恐れていてもはじまらない。ともに切磋琢磨していきたいものである。

Butcher, John G. 2004. *The Closing of the Frontier: A*

History of the Marine Fisheries of Southeast Asia c.

1850-2000. A modern economic history of Southeast

Asia. Singapore: Institute of Southeast Asian

Studies.

Jones, Ryan Tucker and Angela Wanhalla (eds.)

2019. *New Histories of Pacific Whaling*. RCC

Perspectives: Transformations in Environment and

Society 2019/5. München: Rachel Carson Center.

Jones, Ryan Tucker and Angela Wanhalla (eds.) 2021.

Across Species and Cultures: New Histories of

Pacific Whaling. Honolulu: University of Hawai'i Press, in print.

Ogawa, Manako. 2015. *Sea of Opportunity: The Japanese Pioneers of the Fishing Industry in*

Hawai'i. Honolulu: University of Hawai'i Press.

小川真和子、二〇一七、『海の民のハワイ——ハワイの水産業を開拓した日本人の社会史』、人文書院。

小川真和子、二〇一九、『海をめぐる対話 ハワイと日本

——水産業からのアプローチ』、塙選書一二四、塙書房。

森田勝昭、一九九四、『鯨と捕鯨の文化史』、名古屋大学出版会。

(一橋大学大学院社会学研究科教授)